

小澤喜市さん証言

朝鮮人を差別しなかった父が空襲で死んだ

私は、昭和6年3月14日生まれで、当時14歳の佐倉中学校3年生であった。戦時中は学業だけでなく勤労働員もあった。中学校では米軍の上陸に備えて地元で横穴式の壕作りに動員された。壕掘り作業の最先端は朝鮮人が担当し、中学生300人はモッコで土搬出を担当した。また、千葉市蘇我近くの飛行場（当時は飛行機の姿が見えなかった）の掩体壕作りに従事させられた。父は佐倉市で小澤印刷㈱を経営していた。兄弟は男子6人、女子3人の大家族であった。朝鮮人部落が成田へ行く途中にあり、日本人は「あそこは危ない」と陰口を言っていたが、父や兄は差別主義者でなく、私に、朝鮮人を親切にしたので彼らからコメを分けてもらったことすらあった。

ところで、母りんは、空襲前日の1945年6月9日に千葉病院で大腸がんのため59歳で亡くなり、家族数人が千葉病院の病室に集まっていた。母は東京の大病院にいたが、3月10日の東京空襲後、千葉に来て、千葉病院に転院した。千葉医科大学病院もいいが大きい病院は空襲の標的になると言うのでこの小さな病院を選んだ。佐倉の自宅も迷彩のために黒く塗った程の注意であったが、この選択は裏目に出た。

翌日6月10日、8時15分、B29による爆弾攻撃で千葉病院は直撃を受けた。直撃を受けたところは直径27mの大きな穴ができたと言ったことがある。爆撃後、目を見張るとまわりが明るかった。つまり、木造2階建ての建物が吹き飛んだのである。まわりには柱も立っていなかった。真平らになった。病室の隣が薬局であったのでガラス器具が粉々になって床におちたが、私は裸足で歩いていた。

家族で死亡した者は父小澤喜一郎（62歳）、親戚の女性（30代）が犠牲になった。同じ部屋にいた私と長姉の朝（とも）並びにその娘由美子（0歳）は軽傷を負ったが死ぬことはなかった。どのようにして生死をわけたのか。父は病院の「押し入れ」に避難したが、その梁が折れて頭に落下したようだ。兄は外にいたので爆弾の破片を右足に受けたが助かった。長姉は乳児を抱えて避難したが、顔面に負傷した。姉は嫁入り前でなくて良かったと言っていた。私は額に小さな傷を受けた。父は、胆石のために柏戸病院に入院し、医師から「もうこれで死ぬまで胆石にならない」と言われていたことを私に聞かせた。

空襲で亡くなった人は火葬場でまとめて焼かれたので、遺骨が誰のものかわからない状態であった。母も空襲被害遺体と一緒に焼かれたので、偶然にも両親と一緒に火葬されたことになる。（中略）戦後、私は両親のいない家庭に残された。兄弟姉妹はほぼ上級の学校へ進学した。私は英語が得意だったので小さな貿易会社に就職した。そこは外国人が社長なので、いわゆる親なし子への日本的な就職差別はなかった。（中略）

どれだけの人が千葉病院で死んだのか。安倍総理は何と言おうとも、戦争の恐ろしさを知らない。彼に事実を知ってもらいたい。私は、（中略）身体は鍛えたが、登山中雷が起きると空襲の爆音と爆弾の音を思い出すといまだに不安な気持ちになる。

証言年月日：2014.8.7、10.8

横浜市青葉区あざみ野 2-14-7-312

記録者：伊藤章夫 0458774247